



Title	2009年度聞き取り調査班調査報告
Author(s)	黄, 蘊
Citation	周縁の文化交渉学シリーズ7 『フエ地域の歴史と文化 周辺集落と外からの視点 』 : 349-354
Issue Date	2012-03-01
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10112/6280">http://hdl.handle.net/10112/6280</a>
Rights	
Type	Article
Textversion	

# 2009年度聞き取り調査班調査報告

黄 蘊

Report of Inquiry Research group in 2009

HUANG Yun

キーワード：フエ、天后宮、天后信仰、「明郷人」、聞き取り調査

## 1. 調査の概要

2009年8月31日から9月7日まで聞き取り調査班はフォンヴィン（香栄）社明郷（ミンフォン）村で当村にある媽祖を祀る天后宮への人々の関わり方、人々の天后信仰の信仰形態などについて集団での聞き取り調査を行った。

調査対象の選定においては、「明郷（ミンフォン）」の子孫と自認する（思われる）人々、また村のキン族住民、とくに女性信者を対象に選んだ。それぞれの意識形態、動機を明らかにすべく、家族形態、移住の歴史、生業、天后信仰に対する認識といった多方面にわたるインタビュー調査を実施した。

調査の参加者として、黄蘊、熊野建、田中梓都美は専従のメンバーで、その他の参加者として稲垣智恵、鄭英実、馮赫陽、董科、川端歩、松井真希子は個別の聞き取り調査に参加した。集団で行った聞き取り調査では14人（組）のインフォーマントに対して詳細な聞き取りを行い、データを記録した。そのうち、村長、陳踐誠（Trần Tiến Thành）一族十代目の直系子孫である夫婦に対して、二回聞き取りを行った。

## 2. 天后宮の歴史と現在

フエ都城近郊の明郷集落は、17世紀半ばに、明滅亡後に中国から渡来した移住者によって作られた。その名称は、最初の「大明客舗」から、「明香社清河舗」を経て、1827年に阮政権の規定により「明郷社」へと改称した。この「明郷社」の住民とその子孫たちは移住の歴史を受けて、「明郷」という独自のアイデンティティを有するとされる。しかし、一方で彼らは積極的に土着化の道を選ぶ集団でもあり、今日「明郷」の子孫と思われる人のほとんどはキン族と自称し、あいまいな自己認識を有するものが多

いとみられる。

明郷集落に1685年に創建されたとされる天后宮という宗教施設がある。それは中国からの移住者が彼の地に移住し、定着したまもない頃に作られたものと推測される。天后宮のほかに、明郷村の人はもう一つの宗教施設となる関聖殿を建てている。関聖殿の創建時期は不明だが、かつての明香社の地理的範囲が今日の地霊村に及び、明香社の人々がそこに関聖殿を建てたとされる。明郷の関係者は天后宮を *Chùa Bà* といい、関聖殿を *Chùa Ông* と呼んでいる。

インフォーマントたちの話では、天后宮 (*Chùa Bà*) と関聖殿 (*Chùa Ông*) は本来明郷関係者にとって同じように重要で、その地位も一緒であった。しかし、関聖殿 (*Chùa Ông*) は1787年に地霊村への土地返還とともに、その所有権も地霊村に変わったため、今日明郷関係者の信仰の中心は天后宮 (*Chùa Bà*) に一本化するようになった。

天后宮の祭礼は一年を通して複数あるが、そのうちとくに重要な祭礼として以下があげられる。

1月16日：年頭の祈安

城隍神廟で供え物を捧げ、正殿で儒礼を行う。肉料理のお供えなどをする。

1月17日：婦人の礼

明郷の女性のための祭りである。現在村のキン族女性、また村外の女性参加者も多数参加しているとみられる。

3月23日：天后の忌祭

本宮最大の行事である。内外の明郷人が集まる機会でもある。

7月16日：先賢祭礼

別称百族の命日、あるいは秋祭。先賢堂で村の創建者や、歴代朝廷に仕えた村出身者、村の役職者を祀る祭礼である。

11月22日：陳踐誠 (*Trần Tiễn Thành*) の誕生日

上記の祭礼のうち、1月17日に行われる婦人の礼は、もっとも多くの非明郷子孫の参加を集めるものである。その他の祭礼は基本的に明郷関係者の参加が中心となっている。

天后宮 (*Chùa Bà*) で行われる祭礼をめぐって、祭礼を司る儀礼班があるほか、資金運営を行うための *Chùa Bà* 基金という明郷の27姓（多くは他所に移住している）の寄付で作られた基金もある。そのほか、1月17日の婦人の礼を行うために発足した女性組織「婦人会」という組織がある。儀礼班と *Chùa Bà* 基金はいずれも明郷子孫を構成員にもつ排他的なものであるが、婦人会は一般にオープンする組織である。

以上の祭礼とそれにかかわる組織からみると、天后宮は基本的に明郷子孫のための宗教施設であることが分かる。実際今日明郷子孫の自己認識がかなりあいまいな状態になっているなかで、天后宮と天后信仰は「明郷人」であることの明示的な指標の一つとなるといえる。

一方で、子供を産む女神として天后信仰は近年明郷村内外のキン族（とくに女性）の信仰をも集め、別の意味での女神信仰として存在している一面もある。

明郷の子孫とされる人々、キン族の女性信者は具体的にどのような考えをもち、いかに天后信仰にかかわっているのかについて、聞き取り調査を通してその分析を試みた。

### 3. 人々の語り

複数のインフォーマントのうち、以下明郷子孫と自認する二組とキン族女性一人から得た聞き取りのデータを挙げ、今日明郷村の人々の生活世界と彼らの天后信仰の具体的な形態を垣間見てみたい。

(1) Nhan Đạo Thông（要確認 Trong では？木村氏は Trong と報告）1952年生、男性

〈本人の状況〉

果樹栽培（バナナなど）と畑が仕事。妻は La Khê（ラーケー）村出身の京族である。バオビンの市場で物を売っており、それが主な収入源となる。

祖先は中国人だったが、今はすでにベトナム化した。兄はダナンの町に住んでいるため、末っ子の自分が祠堂を任された。祠堂は子供の頃からあった。1996年に再建され、二年前にペンキを塗り替えた。

お父さんは漢字が読めたが、自分はわからない。おじいさんは阮王朝で仕事をした（書類を管理する仕事）。父は1975年に、病気で亡くなる（享年70歳）。

五人兄弟で、兄たちは1975年以前から軍隊に参加した。自分以外の他の兄弟は皆ダナンに住む。

〈祠堂に関して〉

土地は先祖から継承したものである。祠堂は1968年に破壊されたので、70年代に再建した。再建にあたっては、兄弟が集まる場所として立派にしようと思った。祠堂の建設資金は7000ドンかかった。

祠堂の内部の建築はラーケー村の職人に任せた。この村にこういった職人は何人かいる。

〈Chùa Bà に関して〉

自分は子供の時遊びに行っていた。（祭りの後料理があったので、子供たちは喜んで行った。）おじいさん、お父さんたちはたぶん行っていた。お父さんは Chùa Bà に対して特に熱心ではなかった。

自分は15歳からニャチャン（Nha Trang）へ生きる為に姉を頼って行った。1975年に村へ戻ってきた。それから Chùa Bà に行きだした。ここ10年くらい特に熱心である。最初の20年の間は経済的に大変で、仕事も忙しかった。今は精神的なことを重んじるようになったので、積極的に参加している。

ここ10年、良いことがないとは言えない（Chùa Bà おかげじゃないとは言えない）

何かあったら拝みに行く。御神籤は女性だけ、問題あったときだけ祈りに行く。

先祖はたぶん寄付はしたと思う。もし今寄付しろと言われれば寄付くらいはする。

自分はいつも一人で行く（子供は自由）。奥さんは商売をやっていて忙しいから行かない。

(2) Hồ Văn Hùng 1937年生、72歳、男性

〈移住史、家族関係〉

先祖は Chùa Bà の先賢祠堂には入っていない。先祖は200年前 Thanh Hung（？）村へ移住、150年前に明郷村に移住してきた。

妻（Lê Thu Hương）は村の出身ではない。母（Trần Thị Tâm）は明郷出身である。7人兄弟。Trần

Tiền Thành の子孫である。

〈個人の経歴〉

1959年～1968年に南ベトナム軍に入隊、情報担当だった。戦争中に負傷、右目が不自由になった。

戦後、フェ市で公務員として15年（道路関係）働いた。

仕事探しに苦労していた。子どもを育てる手段を見つけられるよう心の中で祈っていた。政府関係の仕事に応募し、採用された。収入は一家を養うのに十分ではなかったが、安価で米を購入できるなどの特権によりなんとか生活することが出来た。

心では、常にいいことをすればいい結果が出ると考えながら生活していた。

〈Chùa Bà との関わり方〉

父は運営委員会のメンバーだった。Chùa Bà にはよく行っていた。自分はメンバーではないが、年に6回程度行く（全行事は8回程度）。寄付は大きな行事の時に5万ドン程度している。

いつも家内安全を祈っている。御神籤は引かない。今日9月4日は大雨により秋祭には行けなかった。春祭にも行っている。

自分は明郷の子孫であるので熱心に参加している。一家に一人代表者がいればいいので、妻はあまり行かない。子ども（4男1女）は全員村に住む。長男は3分の1の行事に行っている。子供のなかで1番よく行く方である。

〈その他の宗教活動〉

祖先祭祀。

仏教は信仰せず。

家の仏像はただ習慣として設置している。

〈祠堂〉

毎月1、14、15、30日にお酒を供えて拝む。

親族は正月と命日（法事）に祠堂に集まる。

観音像を置くのは習慣であり、どこの祠堂にも置いてあるので。

(3) Trương Cơ 1943年生まれ、キン族、男性

〈家族〉

もともとディアリンに住んでいた。1988年に家族全員でこの村に移住してきた。現在の生計は、盆栽の店をやっている。妻は市場で肉屋を営んでいる。

〈仏教の信仰について〉

ディアリンに住んでいた時は、町の寺に行っていた。現在も仏教徒である。

20歳の時から、仏教の教えが自分にとって良い、ということに気づいた。妻も仏教信者である。自分の親の世代は、信仰はなく祖先祭祀だけである。家で観音菩薩（Phật Quan Âm）を祀っている。

〈Chùa Bà 委員会との関係について〉

1988年この村に移住後、Chùa Bà の委員会から手紙をもらうようになった。委員会から知らせがあったら、行事（祭り）に行く。

〈Chùa Bà との関わり方について〉

移住後、天后宮に行きだした。それは、近いため行くようになった。

天后宮に対する認識として、地方のお寺というイメージをもつ。地方の行事に参加するだけで、それ以上のことは知らない。

天后宮に行くことに関しては、まわりの人も行くので、自分も行く。友達が増えた。

3人の子供のうち1人が男。皆Chùa Bà に行かない。妻も好きではないので、行っていない。自分は村の社会生活、コミュニティ活動参加するために行っている。

Chùa Ông にも時々行っていたが、自分の信仰ではないので今は行かなくなった（Chùa Ông は今だけでなく昔からキン族は信仰していた）。

〈Chùa Bà への認識〉

中国の神と聞いているが、自分は確認していないので特に気にしていない。

〈村に対する認識について〉

中国人の子孫が多い、という話は聞いているが、自分は気にしていない。

この村の風俗習慣は、自分の本来の習慣と異なる。たとえば、早起きをする、庭や畑の仕事を一生懸命する、などである。

#### 4. 考察

天后宮は「明郷人」たちの信仰のセンターとして建てられたが、今日その存在意義は信仰という点のほか、明郷子孫たちのアイデンティティの宗教的象徴ということもあげられる。一方で、近年天后信仰は明郷村内外のキン族にも広く広まり、土着化の様相を呈している。

天后信仰の祭礼に参加する人々の圏域を一つの「祭祀圏」と捉えるなら、その「祭祀圏」の外縁は今日、明郷村また「明郷人」というカテゴリーを越え、拡大傾向をみせている。そこには明郷村、「明郷人」をめぐる社会変動、再編が反映されていると同時に、天后信仰の性格の多層化も表れている。

明郷村は1962年においてすでに近隣の清河村と合併し、明清村になっている。そのため、行政的に独立した村落というかたちをすでにとどめていない。現明清村の村長によると、もと明郷村と清河村の行事は依然それぞれに開催されているが、1月17日の天后宮の「婦人の礼」という行事時に、ほぼ明清村

全体をカバーする範囲で女性たちの熱心な参加がみられる。これは明郷村の境界線の曖昧化を意味する現象の一端と思われる。

「明郷人」については、今日村外や外国への移住現象が進み、明郷子孫の多くはすでに村を出て拡散的となっている。しかし、村外や外国に住む明郷子孫の一部は、天后宮の重要な祭礼時に帰郷するなどして、「明郷人」の一員を無意識に実践しているといえる。そうした状況のなかで、天后宮と天后信仰を軸に、地域にとらわれないフェ明郷村の「明郷人」の圏域がある程度維持できているといえることができる。

このように、今日明郷村を拠点とする天后信仰は明郷村、「明郷人」のあり方の変化に応じて、地理的境界に限定されない信仰形態をみせている。同時に、エスニックな認識の枠組みを越え、村内外のキン族にも波及した天后信仰は新たな性格を築き上げ、土着化の新展開を遂げてきている。

こうした天后信仰をめぐる信仰形態の変化、その意味付けの拡大は明郷村と「明郷人」のあり方を反映するものでもある。上述のように、今日明郷村は独立した行政単位としてのかたちをすでに有していないが、そのカテゴリーに対する認識は依然存続できている。「明郷人」に関しては、今日その該当者の多くは自らをキン族と自認する一方で、キン族とちがう独自性も意識している。そうした現象は土着化の中でのエスニシティの継承といえよう。